青少年地域活動ふるさとを見なおそう　第1集『長門昔ばなし』より

かぎ引き石と河童の池

蓼科山のふもと、大門村と芦田村の境に赤沼の池があり、池の南側にかぎ引き石と言う大きな石がありました。峠の道も今とはちがって狭く通る人もあまりありませんでした。

ある日村人がこの池のそばを通ると、かぎ引き石の上に一人の子供がすわっていました。そして「おじさんおれとかぎ引きをしないか。」と言って、太いうでをつき出しました。

村人も面白半分に二人の指と指をかぎにして引っ張りくらべをしました。

するとその子供の強いこと、村人はいつのまにか、ずるずる引きずられ赤沼の池に引っ張りこまれて死んでしまいました。こういうことがたびたびおきました。

こんなうわさを聞いた諏訪の殿様の家来で立木さまという力の強いさむらいが「よしおれが退治してやろう。」と、馬に乗りかぎ引き石まで来ると案の定子供がいて「おさむらいさんかぎ引きをしないか。」と言った

ので、「ようし」とばかり馬の上からゆびとゆびをからませると「ピシッ」と馬に鞭をあて馬を走らせました。子供はたまったものではありません。引きずられながら「あいたたあー助けてくれー。」とさけびながら、だんだん河童の姿になっていきました。「おねがいです。命だけはお助けください。そのかわり骨つぎを教えます。」河童はなんとも言えないあわれな声でたのみました。それを聞いた立木さまは「ではゆるそう。これから悪さをするでないぞ。」と言って、馬をとめ河童から骨を接ぐ秘みつの法と病気をなおす薬の作り方を教えてもらいました。

立木さまは河童に向かって、「おまえはここにいて、また悪いことをしてはいけない。今日じゅうにどこかへ行ってしまえ。」と強くいいきかせました。

河童は立木さまにいわれたとり、とぼとぼと山をくだり和田村(わだむら)の夜の池(よいけ)に移りひっそりと住むようになりました。

それまではいっぱいの水がたまっていた赤沼の池はひと晩のうちに水がなくなってしまい、河童が住みついた「夜の池」は、ひと晩で、できあがったそうです。

河童から「骨つぎ」を教えてもらった立木さまの名は全国に知れわたり「立木さま」と言うことばが「骨つぎ」と言うことばみたいになり、今でも大門（だいもん）のお年寄りで「上田（うえだ）の立木さまへかよってよくなった。」という人もいます。